Japanese Red Cross Hiroshima Coll. Nurs. 15 111～112. 2015

【研修報告】

第３回世界看護科学学会（WANS2013）に参加して

岡 田 淳 子*，奥 村 ゆかり*，中 村 敦 子*，木 村 佳代子*

はじめに

世界看護科学学会は（World Academy of Nursing Science：WANS）は世界的な共同研究，科学会議，学術交流を通じて 看護学を開発することにより世界中の人々の健康と福祉に貢献することを目的に設立された。世界の看護関連の学術機関が組織会員となって構成されており，現在，世界で17組織，日本では日本看護科学学会他６学会が加入している。

第３回学術集会（3rd World Academy of Nursing Science：3rd WANS）は，9th International Nursing Conference 2013との共同開催で2013年10月16～18日に韓国ソウルで開催された。

写真１　参加受付（会場）

3rd WANS

３回目となる今回は，10カ国以上，約580名の専門職者が参加し，学会テーマは“Care for Vulnerable Populations: Global Perspectives”であった。

招致講演では，国際的に学術活動を行っているAdeline Nyamathi博士（カリフォルニ大学ロサンゼルス校）が登壇され，“Developing Nursing Theory and Science in Vulnerable Populations Research”でテーマであった。博士は地域保健活動を通して，HIV，結核，A・B・C型肝炎などの感染症のリスクは弱者（障害者，高齢者，貧困者など）に多く，健康格差が生じていることを説明され，学術的視点からケアのあり方を講演された。

日本からは，太田喜久子教授（慶応義塾大学）が登壇され，“Nursing care for elderly people with dementia in the aging society of Japan”をテーマに，日本における高齢社会の特徴や認知症高齢者ケアの取り組み，東日本大震災と認知症高齢者について，日本が直面している介護問題について講演された。様々な視点から弱い立場の人々のケアに関する関心は高く，発表後のディスカッションは活発であった。

学会発表の内容

１．岡田は「A Survey of Care for Hand Hygiene Provided by Japanese Nurses.」を示説発表した。病原性微生物は患者の皮膚や直近の物体に存在

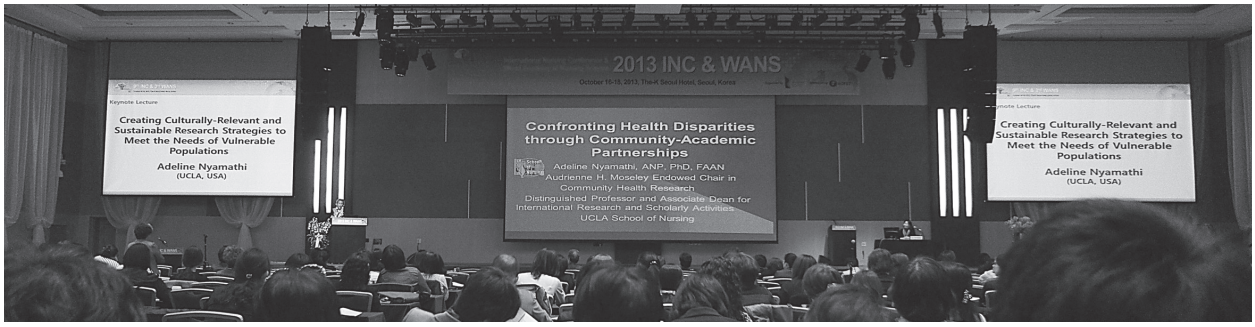

写真２　招致講演

＊　日本赤十字広島看護大学

し，感染源になっている。特に活動低下の患者は手指汚染が顕著であり，患者の手指衛生は感染予防の手段として重要になる。しかしながら，このような患者が手指を清潔にするためには他者による援助が必要になる。入院患者であれば，看護師が手指清潔ケアの援助者になるが，その実態について興味深い結果が得られたので発表した。

調査の対象は運営母体が同一の９施設の医療機関で，いずれかに勤務している看護師255名とした。自記式質問紙を作成し，看護師に活動制限のある患者に手指清潔ケアを実施する時期と頻度，実施理由などを回答してもらい実態を調査した。

ベッド上生活の患者に対して，約75％の看護師がおしぼりタオルを使用し，約半数の看護師が入浴と手浴を週１回実施していた。実施場面は看護師が汚染を発見した時と患者に依頼されたときが最も多く，看護師は寝たきり患者の食事や排泄ケア後に患者の手指衛生を実施していなかった。ところが，看護師は感染防止に有効な手指衛生は流水＋石鹸であり，おしぼりタオルは不十分と認知しながら，簡便に実施できるため日常的に使用していた。また，１割の看護師は「汚れていない」「手を意識していない」と回答し，多忙な業務のなかで活動度の低い患者への手指清潔ケアは実施されにくい現状があった。以上のことから，手指清潔ケアの実施する頻度を増やすために，看護師が他職種に依頼するなど工夫することが示唆された。

２．奥村・中村・木村は「Effects of a Childcare Support Program for Pregnant Mothers on Stress」を示説発表した。

本研究では，正常経過の妊娠末期の母親10名を対象にした育児支援プログラムによる介入の効果を検証した。プログラムの前後に母親の身体的ストレス反応として，唾液アミラーゼ値，LF/HF，肉体疲労度を測定し，心理的ストレス反応として，新版State-Trait Anxiety Inventory（STAI），対児感情（花沢の対児感情尺度）を測定して評価した。対象の平均年齢は30.9±5.5歳，平均妊娠週数は28週で，初産婦６名と経産婦４名であった。育児支援プログラムにより，母親の唾液アミラーゼ値は42.8から49.6 kU/l，LF/HF は1.19から1.14，肉体疲労度は60.7から60.4へと変化していた。また，状態不安は43.6から33.9へと有意な低下を認め，対児感情の接近得点は28.9から29.7に上昇し，回避得点は7.3から6.1，拮抗指数は26.5から19.8へと減少していた。以上のことから，育児支援プログラムは母親の不安を軽減し，母親の児に対する感情が肯定的に変化することが示唆された。今後の課題として対象数を増やし，妊娠期からさらにストレスが高まるとされている育児期にかけて継続的な支援を行い，ストレスへの効果を検証していくことが必要である。

おわりに

開催国である韓国は，日本よりも早いスピードで高齢化が進み，家族機能は変化し福祉問題が深刻化している。韓国の看護界は政府の改革に積極的に参加し，保健・医療・福祉分野を牽引していると言われている。本学会でも韓国看護協会の活気を実感するものであった。隣国である韓国と協働して，看護の専門性を明確にし，実践能力や自律性を強化する取り組みが必要であることを認識する学会参加となった。

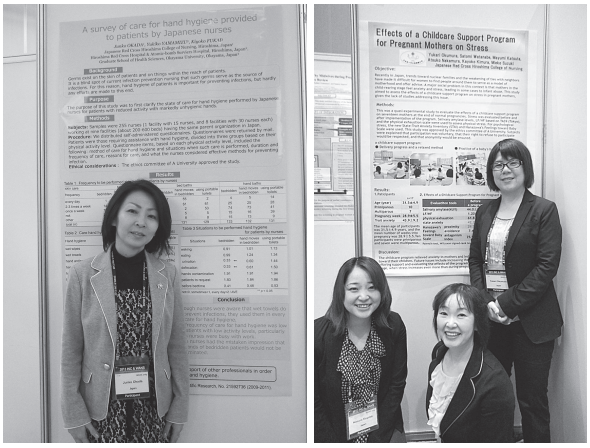

写真３　ポスター発表会場

謝　　辞

今回の国際学会に出席する機会を与えてくださいました本学の関係者の皆様に感謝いたします。

参考文献

WANS:World Academy of Nursing Science.http://wans.umin.ne.jp/. 検索日2014.10.31.

赤司千波（2007）．韓国における保健医療制度改革と看護職のあり方(Dr. Euisook Kimの講演から)．看護科学研究，７，43-47.